

『勝ち組・負け組』論の真実

—JGSS-2002 データにおける幸福感規定要因分析からの考察—

山田 憂子

(同志社大学文学部社会学科*)

The truth of the theory of winner and loser

Examination from an analysis of the determinants of people's happiness

Yuko YAMADA

Department of Sociology, Faculty of Letters

Doshisha University

This paper examines the factors that determine people's happiness of each generation. Analyses of the JGSS-2002 data showed that the people's happiness is determined by sex and marriage. And the analyses showed that woman is happier than man, and that the married people are happier than the single. Furthermore, it turned out that the happiness in married life was not concerned with the generation or the employment status, but has had influence of plus on an overall happiness about a married woman. Moreover, it proved that, inside the relation of the employment status itself and happiness about which is argued in the theory of the winner and the loser for a married woman, the difference in the factors that determine their happiness is in the difference of lifestyle by the employment status.

Key Words : JGSS-2002, happiness, employment status

本稿では、JGSS-2002 のデータをもじいて、人の幸福感を規定する要因について、世代別に分析を行った。その結果、人の幸福感は①性別②結婚状況によって規定されており、男性より女性、未婚者より既婚者で幸福感が高いことが確認された。さらに既婚女性に関しては、世代や就業形態に関わらず、結婚生活における幸福感が全体的な幸福感にプラスの影響を与えていたことが分かった。また従来、既婚女性を対象とした「勝ち組・負け組」論において議論されているような、就業形態そのものと幸福感の関係の内部には、就業形態別での“ライフスタイル”の違いによる、幸福感規定要因の違いが認められた。

キーワード : JGSS-2002、幸福感、就業形態

*論文執筆当時の所属

1. 問題設定

「どんなに美人で仕事ができますが、30代以上・未婚・子なしは『女の負け犬』である」。このような定義づけをキャッチコピーとした酒井順子の『負け犬の遠吠え』が2003年に出版され、大ヒットし、またこの『負け犬』という言葉が2004年流行語大賞を受賞したことは、そう記憶に遠くない。近年、テレビや雑誌などのメディアにおいても『勝ち組・負け組』といったニュアンスの言葉が多用され、『勝ち組・負け組』をテーマとしたものが多く見受けられる。

ところで、この『負け犬』という言葉であるが、現代新国語辞典によると「けんかに負けて、こそそと逃げる犬。比喩的に、惨めな敗北者の意にも用いる」とされていることからも分かるように、決してイメージの良い言葉ではなく、また大抵「女性」に対して用いられることが多いように思う。

また酒井（2003）は「負け犬は女として幸せではない」と述べているが、30代以上・未婚・子なし女性が『負け組』だとすれば、それ以外の既婚女性は、本当に『勝ち組』であり幸せだと言えるのだろうか。このような疑問から、本論文では、『勝ち組・負け組』論を通して、性別・結婚状況・就業形態などの属性と幸福感、そして幸福感規定要因の構造を明らかにする。

2. 先行研究

『勝ち組』『負け組』について書かれているものとして、興味深いものを次に挙げる。まず酒井順子（2003）は、『負け犬』の定義として「狭義には、未婚、子ナシ、三十代以上の女性のことを示す。」と述べている。またこの中で最も重要視されるのは「現在結婚していない」という条件であるとし、どれほど仕事において有能だろうが、美人だろうが、異性にモテようが、この負け犬条件にあてはまる女性は全て負け犬であるとした上で、普通に結婚して子どもを産んでいる女性一般を『勝ち犬』であると定義付けている。

次に山田昌弘（2001）は、総理府の調査で40歳代男性の生活満足度が最も低いことを指摘し、経済的側面から「勝ち組は育児期も共働きしつづけた夫婦であり、負け組は、専業主婦、もしくは、低賃金のパートで働く妻をもつ家族である。」と述べている。また現時点の日本家族の分類として、①共働き夫婦（妻一男性並収入）、②片働き専業主婦、③共働き（妻一低収入）、④親と同居する未婚女性、⑤低収入未婚男性の5つのタイプのライフスタイルを挙げ、「現在の経済状況では、①のみが勝ち組となり、②-⑤が負け組になる。」と述べている。

そして、山田が共働きの既婚女性を『勝ち組』とする一方で、「ステキな専業主婦願望」が広がっているという指摘もある。ただしそれは、所帯臭く、夢のない専業主婦像ではなく、若い主婦層をターゲットとした雑誌「VERY」に登場するような「ステキな主婦」である。小倉千加子（2003）は、結婚した女には、夫の稼ぎで十分食べられる女、妻も働かなければ食べられない女、妻が夫を養う女の3つの身分があり、「結婚の勝ち組は、言うまでもなく、夫の稼ぎにおんぶする女である」と述べている。

また、2003年の「第12回出生動向基本調査」において、独身女性が理想とするライフコースを見ると、1987年から専業主婦を理想とする女性は減少傾向にある一方、両立や再就職を理想とする女性は増加傾向にある。しかし、両立を希望する女性に比べ、依然として再就職を希望する女性が多いことから、未婚女性の考える幸せ、つまり『勝ち組』モデルは再就職コースであると言えるのではないだろうか。ただし、出産で退職し、子育て優先の生活をした女性が再就職で正規雇用の職に就くことは難しく、厚生労働省の2000年「雇用動向調査」によると、再就職層（33歳～44歳女性）の入職は、パートタイムが70%以上を占めていることから、本稿では「再就職」を「パートタイム」と捉えていきたい。

以上から分かるように、一言に『勝ち組』と言っても、既婚女性一般を指すもの（酒井2003）や既婚で共働きのフルタイム女性やその夫を指すもの（山田2001）、専業主婦、また家計補助のためにではなく、自己実現のために働く既婚女性を指すもの（小倉2003）などさまざまである。また、パートで働く既婚女性が勝ち組モデルであると考えられるような調査結果も存在することから、論者によって『勝ち組』『負け組』はどのような人なのか、それぞれで違いが認められる。

3. 分析枠組み

3.1 データ概要

本論文では、二次分析に当たり、東京大学社会科学研究所附属日本社会研究情報センターSSJ データアーカイブから「日本版 General Social Survey<JGSS-2002>」(大阪商業大学比較地域研究所・東京大学社会科学研究所)の個票データの提供を受けた。JGSS-2002 は、日本の社会と人々の意識や行動の実態把握を目的とし、2002年10月下旬～11月下旬にかけて、2002年9月1日時点で全国に居住する満20～89歳の男女個人を対象に実施された全国調査である。また配分された5000の標本のうち、回収率は62.3% (有効回収数は2,953) となっている。分析にあたっては、30歳代以上の未婚者数が少數であったため除外し、既婚者を対象とする。そして、常時雇用の一般従業者全般をフルタイム、臨時雇用・パート・アルバイトをパートタイムと分類した上で、30～50歳代のフルタイム既婚女性、パート既婚女性、専業主婦の計575人を対象に分析を行う。

3.2 分析枠組み

前述した先行研究として挙げた『勝ち組』『負け組』論においては、①性別、②結婚状況、③既婚女性に関しては就業形態、という3つの要因によって『勝ち組』『負け組』が規定されていた。そこで実際に、①～③のそれぞれに関して、全体的な幸福感の比較を世代別で行った結果、①②の要因は幸福感に影響を与える要因となっていることが確認された。しかし③の要因に関しては、30～50歳代の既婚女性の平均幸福度は、フルタイム女性で3.93、パート女性で3.91、専業主婦で3.92と、就業形態の違いによる差は認められなかった。また世代による違いも有意ではなかった。しかしながら、図1から分かるように、世代ごとにみると、就業形態によって、既婚女性の幸福度が異なることがわかった。

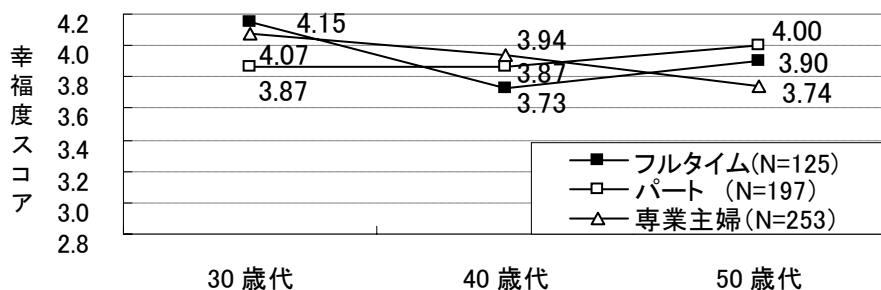


図1 就業形態別の幸福度

この背景として、既婚女性に関しては、就業形態の違いによる生活時間や可処分所得などの違いが考えられる。つまり、就業形態の違いによって、時間の使い方や生活様式など、「ライフスタイル」が異なるのである。ここから、就業形態の違いと幸福感の関係の内部には、就業形態の違いによるライフスタイルの違いが幸福感に影響を与えていたという関係が存在するのではないかという仮説が立てられる。

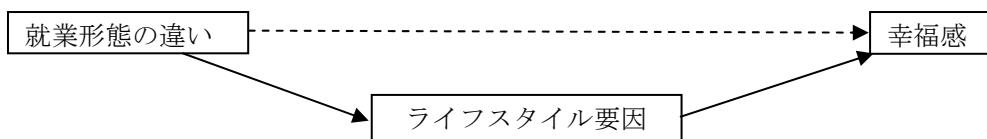


図2 就業形態と幸福感の関係 (仮説)

以上のことから、本論文では、就業形態別でのライフスタイルの違いが幸福感に影響を与えていたという仮説を立て、30～50歳代の既婚女性において、ライフスタイル要因であると考えられる具体的な変数と幸福感との関係を見ることで、既婚フルタイム女性、既婚パート女性、専業主婦のそれぞれ

において、実際にどのようなライフスタイル要因が幸福感に影響を与えているのか、各世代における就業形態別での幸福感規定要因を探ることを目的に分析を行う。

3.3 変数

ライフスタイル要因としては、1) 時間の使い方に大きな影響を与えていると考えられる「本人の労働日数・時間」、2) 余暇の使い道として考えられる「友人との会食」、「スポーツ参加」、「趣味の会への参加」や「1泊以上の旅行」、3) 既婚者（有配偶者）を主な分析対象としていることから、結婚・家庭生活に関係すると考えられる「夫の就労日数・時間」、「家族そろった夕食頻度」、そして「夕食の準備」「洗濯」「買い物」「掃除」などの家事頻度と夫の協力頻度、4) 生活水準や可処分所得に関係する「世帯年収」、「夫の年収」、「本人の年収」、5) 世帯員に関係する「義母との同居」、「子どもの有無・人数」、「子・孫との同居」、6) さらに属性としての「本人・夫の学歴」などが考えられることから、以下の分析では、これらの変数をライフスタイル要因として独立変数に用いる。また従属変数としては、調査票のQ41「あなたは、現在幸せですか」という設問に対する答えを「幸せ」=5点～「不幸せ」=1点の得点として計算し、各変数における幸福度の平均を幸福度スコアとして用いる。また調査票のQ61「あなたの結婚生活は幸せですか」、Q7「家庭生活・友人関係・余暇の過ごし方について、あなたはどのくらい満足していますか」、問7-4「現在の主な仕事にどのくらい満足していますか」という設問に対する答えも同様にスコア化して用いる。

なお、これらのライフスタイル要因のうち、その数値が高くなるにつれて幸福感も高くなっているという関係が見られるというように、幸福感との間に「標準化された残差から判断した共変関係」が見られるものを、幸福感規定要因とする。また専業主婦に関しては、「家事」を仕事と捉えた場合の満足度を「仕事満足度」としていることに留意されたい。

4. 分析結果

4.1 30歳代

表1 30歳代の幸福度・満足度スコア

【30歳代】	結婚生活	家庭生活	仕事	友人関係	余暇生活	全体的幸福
フルタイム(N=33)	4.15	3.52	3.88	3.52	3.27	4.15
パート(N=54)	3.87	3.55	3.52	3.58	3.43	3.87
専業主婦(N=82)	4.12	3.67	3.71	3.79	3.28	4.07

30歳代に関しては、表1から分かるように、全てのグループにおいて、結婚生活幸福度が最も高く、全体的な幸福度以上のスコアとなっている。そして結婚生活が幸福であると感じているほど、幸福感が高くなっていることから、結婚生活の幸福度が全体的な幸福感を高めるプラスの効果を持つと考えられる。またフルタイム女性に関しては、他のグループに比べ、仕事満足度が高く、専業主婦に関しては、友人関係満足度が高いことが特徴として挙げられる。

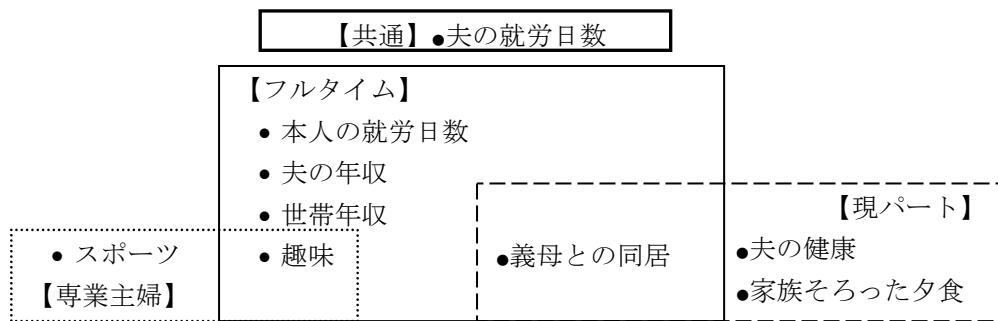


図3 30歳代の幸福感規定要因

図3の幸福感に影響している要因に関しては、夫の就労日数を除き、既婚フルタイム女性、既婚パート女性、専業主婦のそれぞれで違いが見られる。全てのグループに共通する幸福感規定要因である夫の就労日数に関しても、既婚フルタイム女性と専業主婦では夫の就労日数が少ない方が幸福感は高く、反対に既婚パート女性では就労日数が多い方が幸福感が高いというように、就業形態の別で違いが見られる。既婚フルタイム女性では、仕事満足度が高いことから、仕事における充実をうかがうことができ（表1）、実際に本人の労働日数の多さが幸福感を高める要因となっている。また専業主婦では、スポーツや趣味の会への参加が幸福感に影響を与えていることから、仕事を持たない専業主婦においては、自己投資の時間を持つことが幸福感を高める要因になるとも考えられるだろう。

また30歳代では、仕事と家庭を両立させている既婚フルタイム女性と既婚パート女性において、義母との同居が幸福感を高める要因となっている。実際に30歳代で義母と同居している割合は、フルタイム女性で約30%、パート女性で約19%、専業主婦では約16%となっており、フルタイムやパートとして働く女性において、専業主婦に比べて同居率が高くなっている。この義母との同居状態における幸福度を示したものが、次の図4である。

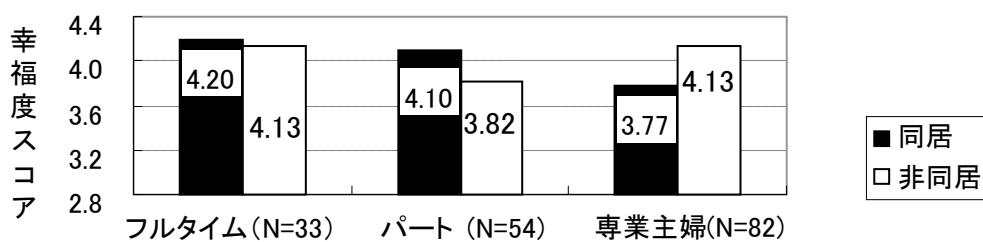


図4 義母との同居と幸福度

図4から、同居している場合の幸福度スコアは、専業主婦で3.77と非同居（4.13）に比べて低くなっているのとは対照的に、フルタイム女性・パート女性ではそれぞれ4.20、4.10と非同居（4.13、3.82）に比べ高くなっていることが分かる。この背景として、30歳代のフルタイムやパートとして働く女性に関しては、子どもがまだ小さいことも十分に考えられることから、義母との同居によって家事や育児における協力などが得られるため、同居が全体的な幸福感を高める効果を持つと考えられるのではないだろうか。一方の専業主婦に関しては、友人関係満足度が3.79と、既婚フルタイム女性（3.52）や既婚パート女性（3.58）に比べて高くなっている（表1）。このことを考慮すると、友人との付き合いにおいて、義母との同居が不都合に感じられるなどの理由も推測できることから、同居している女性で幸福度が低くなっていると考えられるのではないだろうか。これらのことから、幸福感に影響を与える要因は、就業形態別によるライフスタイルの違いを反映していると考えられるだろう。

またフルタイム女性に関しては、夫の年収の高さが全体的な幸福感を高める要因となっていることに加え、世帯年収の高さも全体的な幸福感を高める要因となっている点に特徴がある。このことは、30歳代の既婚フルタイム女性においては、本人の年収そのものが幸福感規定要因とはなっていないものの、家計を支える一部となっていると推測されることから、夫の年収に加え、本人の年収を含めた世帯年収の高さも幸福感を高める要因になっていると考えられるだろう。

4.2 40歳代

表2 40歳代の幸福度・満足度スコア

【40歳代】	結婚生活	家庭生活	仕事	友人関係	余暇生活	全体的幸福
フルタイム (N=53)	<u>3.92</u>	3.48	<u>4.02</u>	3.64	<u>3.02</u>	<u>3.73</u>
パート (N=75)	<u>3.91</u>	3.37	3.75	3.48	3.31	<u>3.87</u>
専業主婦 (N=70)	<u>4.04</u>	3.57	3.77	3.51	3.39	<u>3.94</u>

40歳代に関しても30歳代と同様に、結婚生活の幸福度が全体的な幸福感を高めるプラスの効果を

持つと考えられる。既婚フルタイム女性に関しては、余暇生活の満足度が 3.02 と、他のグループに比べ目立って低くなっている一方で、仕事満足度は 4.02 と目立って高くなっている。このことから、フルタイム女性では、仕事に満足感や充実感を感じると同時に、仕事と家庭・子育ての両方での役割期待に負担を感じていると推測でき、一方では余暇やゆとりがないことに対する不満が存在するとも考えられるだろう。また既婚パート女性においても、家庭や余暇生活への満足度に比べて、仕事満足度が比較的高いと言える。この背景としては、子どもから手が離れる 40 歳代においては、外で働くことが気分転換になったり、充実感の獲得につながったりしていることなどが考えられるのではないだろうか。

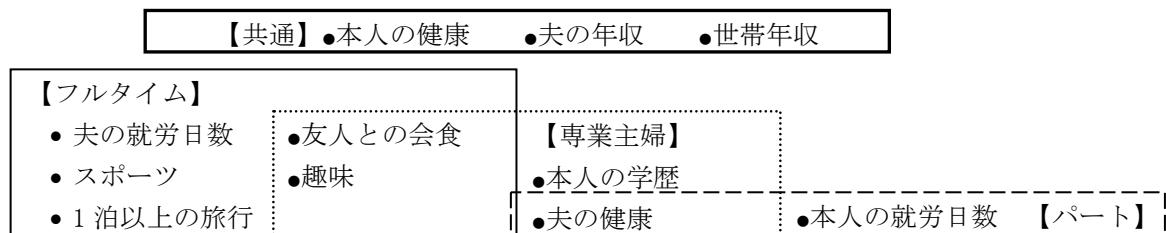


図 5 40 歳代の幸福感規定要因

図 5 の幸福感に影響している要因に関しては、フルタイム女性、パート女性、専業主婦に共通して、本人の健康と家計に影響する収入が全体的な幸福感を高める要因となっている。本人の健康に関しては、40 歳代の既婚フルタイム女性、既婚パート女性では、仕事と家庭・子育ての双方からの大きな役割期待に応えるためにも、健康であることが重要になると考えられるのではないだろうか。そして夫の収入や世帯年収が幸福感規定要因となっている背景としては、40 歳代では子どもが大きくなって学校に入るなど、教育費もかかるようになることが考えられるだろう。図 6 は、40 歳代の既婚女性の夫の年収による幸福度を示したものである。

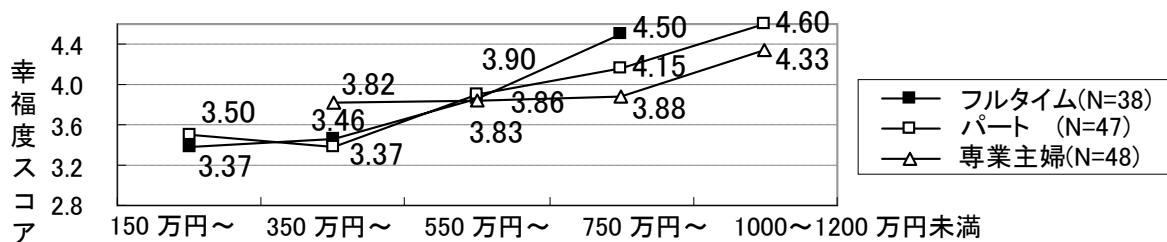


図 6 夫の年収と幸福度

夫の年収が幸福感にプラスの影響を与えるのは、30 歳代ではフルタイム女性のみであった。しかし図 6 から分かるように、40 歳代では全ての既婚女性において、夫の年収の高さにほぼ比例して幸福感が高くなっている。このことから、40 歳代では就業形態に関わらず、全ての既婚女性で共通して、夫の年収の高さが全体的な幸福感にプラスの影響を与えていていると言える。この背景としては、40 歳代の既婚女性のうち約 94% が 1 人以上の子どもを持っており、40 歳代は金銭的な負担が大きくなる世代であると言えることから、経済的な余裕が 40 歳代の既婚女性の幸福感につながっていると考えられるだろう。また既婚フルタイム女性と既婚パート女性では、幸福度の最高スコアと最低スコアの差が 1 ポイント以上あるのに対して、夫の年収が 350～1000 万円未満である専業主婦の幸福度は年収の高さによってそれほどかわらない。このことは、既婚フルタイム女性、既婚パート女性に関しては、労働による金銭を得ていない専業主婦よりも、本人が働いていることによって、経済面での評価が厳しくなることに起因すると考えられるのではないだろうか。

フルタイム女性においては、このように夫の年収だけでなく、世帯年収も幸福感規定要因となっているが、仕事満足度が高いにも関わらず、本人年収の高さが幸福感にプラスの影響を与えていているとい

う結果は得られなかった。その背景として、フルタイム女性にとって 40 歳代は、仕事が充実する時期であると同時に子育てなど、家庭における負担も重い世代である。年収の高さは、責任や仕事量の重さを表していることから、年収が高いほど仕事における負担も重いと考えられ、「仕事」と「家庭」両方での役割期待の重さゆえ、年収の高さが必ずしも幸福感を高める要因になっていないと考えられるだろう。またパート女性に関しても、就労日数・時間の短さが幸福感規定要因となっており、年収 70-100 万円未満の「仕事」と「家庭」のバランスが取れていると考えられる女性のみ、幸福感が高くなっていた。つまり、40 歳代の働く既婚女性においては、「仕事」と「家庭」両方における役割期待の重さが、本人年収の高さが必ずしも幸福感にプラスの影響を与えない原因となっていると考えられるだろう。

4.3 50 歳代

表 3 50 歳代の幸福度・満足度スコア

【50 歳代】	結婚生活	家庭生活	仕事	友人関係	余暇生活	全体的幸福
フルタイム (N=39)	3.82	3.54	3.97	3.54	3.33	3.90
パート (N=68)	3.94	3.54	3.71	3.63	3.40	4.00
専業主婦 (N=101)	3.77	3.39	3.60	3.58	3.22	3.74

50 歳代に関しても、30・40 歳代と同様に、結婚生活の幸福度は全体的な幸福感を高めるプラスの効果を持つと考えられる。またフルタイム女性に関しては仕事満足度が高く、一方、専業主婦に関しては、家庭生活満足度と余暇生活満足度が他のグループに比べて低くなっていることが特徴として挙げられる。この背景としては、子育ての終了による心境やライフスタイルの変化が考えられるのではないだろうか。外での仕事を持たない専業主婦にとって、子育ては大きな仕事であると考えられる。しかし 50 歳代になり、今まで生活の大部分を占めていた子育てという仕事が無くなることで、脱力感のようなものが生まれ、幸福感が低くなっていると推測することもできるのではないだろうか。

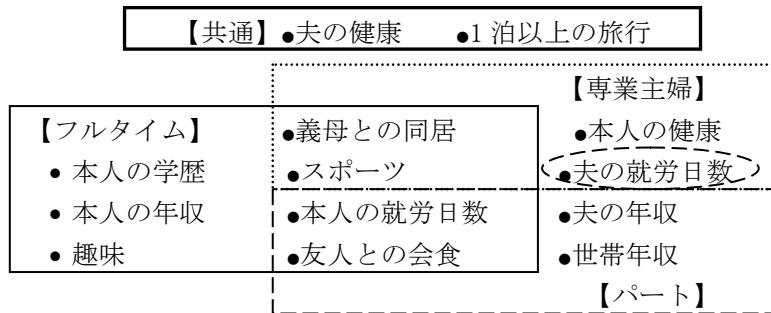


図 7 50 歳代の幸福感規定要因

図 7 の幸福感に影響している要因としては、就業形態にかかわらず、1 泊以上の旅行頻度の高さが幸福感を高める要因となっている。この背景としては、50 歳代では専業主婦だけでなく、仕事を持つ既婚女性に関しても、子育てという大きな仕事が終わることで、時間や家計における余裕や、精神的な余裕が生まれることが考えられる。その結果として、生活が仕事と趣味・娯楽の 2 本柱にシフトし、自分の時間を持つことが幸福感にプラスの影響をもたらすと推測できるのではないだろうか。既婚パート女性においては、この傾向がよく現れており、余暇生活満足度が比較的高いことからも分かるように、40 歳代では見られなかつたような 1 泊以上の旅行や、友人との会食が幸福感を高める要因となっている。さらに友人関係満足度も、既婚フルタイム女性や専業主婦に比べて比較的高くなっていることから、50 歳代では家庭以外の面での充実が幸福感にプラスの影響を与えていていると考えられる（表

3)。

5. 考察

本論文の結論としては、1つ目に人々の幸福感は、①性別と②結婚状況の2つの要因によって影響されていると言える。そして2つ目に、30~50歳代の既婚女性においては、①世代や就業形態に関わらず、結婚生活の幸福度が全体的な幸福感にプラスの影響を与えていていること。そして、フルタイム女性では働くことに関する要因が、専業主婦では家族や趣味に関する要因が、パート女性ではフルタイム女性と専業主婦双方の要因が全体的な幸福感に影響していることから、②全体的な幸福感に影響を与えている要因は、世代や就業形態の違いによって異なり、それらはライフスタイルの違いに起因していると考えられる。この2つが結論付けられたことから、本稿の前半で推論したように、『勝ち組・負け組』論において議論されているような、フルタイム・パート・専業主婦といった就業形態そのものと幸福感の関係の内部には、就業形態の別によるライフスタイルの違いによる幸福感への影響が証明されたと言えるだろう。また世代別に見ると、世代があがるにつれて、既婚フルタイム女性、既婚パート女性、専業主婦の3グループのうち、2グループ以上で共通する幸福感規定要因が増えていることから、就業形態の別によるライフスタイルの違いは、世代が上がるにつれて縮小する、つまり同化していくと推測できるのではないだろうか。

人の幸福感はそれぞれの属性によって決まるのではない。属性の違いによるライフスタイルの違いによって、幸福感規定要因が異なるため、ある一点から見た場合、あたかも属性別で幸福感に差が存在するよう見えててしまうと考えられる。つまり、先行研究に見られるような、ある決まった属性を持つ人が勝ち組、異なる属性を持つ人は負け組というはっきりとした定義づけをすることは難しく、ライフスタイルによって違いはあるものの、全ての人が満たされている面と満たされていない面の両方を持ち合わせていることから、勝ち組・負け組論の視点によって、誰もが勝ち組にもなれば、負け組にもなる。要するに、ライフスタイルの違いによって、幸福を感じるポイントは異なるため、どのライフコースが勝ち組、負け組と言うわけではなく、本人の希望するライフスタイルを選択することが、幸福感の高い人生を送ることの出来る方法、すなわち『勝ち組』になる方法であると言えるのではないだろうか。

[Acknowledgement]

日本版 General Social Surveys (JGSS) は、大阪商業大学比較地域研究所が、文部科学省から学術フロンティア推進拠点としての指定を受けて(1999~2003年度)、東京大学社会科学研究所と共同で実施している研究プロジェクトである(研究代表: 谷岡一郎・仁田道夫、代表幹事: 佐藤博樹・岩井紀子、事務局長: 大澤美苗)。東京大学社会科学研究所附属日本社会研究情報センターSSJデータアーカイブがデータの作成と配布を行っている。

[参考文献]

- 土肥伊都子, 1999, 「“働く母親”、多重役割の心理学」東洋編『流動する社会と家族 1 社会と家族の心理学』ミネルヴァ書房:113~136.
- 本田由紀, 2002, 「何が仕事の満足度を決めるのか」岩井紀子・佐藤博樹編『日本人の姿 JGSS にみる意識と行動』有斐閣:93~98.
- 井上輝子・江原由美子編, 2005, 『女性のデータブック [第4版]』有斐閣.
- 岩井紀子, 2002, 「幸せですか—日本人の幸福感—」岩井紀子・佐藤博樹編『日本人の姿 JGSS にみる意識と行動』有斐閣:2~8.
- 数井みゆき, 1998, 「結婚・夫婦関係の心理学」柏木恵子編『結婚・家族の心理学—家族の発達・個人の発達—』ミネルヴァ書房:51~97.
- Michael Argyle, 1987, The Psychology of Happiness. (=1996, 石田梅男訳『幸福の心理学』誠信書房.)

- 日本労働研究機構編, 1997, 『女性の職業・キャリア意識と就業行動に関する研究』 日本労働研究機構.
- 小口孝司, 2001, 「M 字の選択」 諸井克英・宗方比佐子・小口孝司・土肥伊都子・金野美奈子・安達智子編『彷徨するワーキング・ウーマン』 北樹出版:91-110.
- 小倉千加子, 2003, 『結婚の条件』 朝日新聞社.
- 酒井順子, 2003, 『負け犬の遠吠え』 講談社.
- 和田秀樹, 2005, 『「負け組女」の逆転勝利術』 マガジンハウス.
- 山田昌弘, 2001, 『家族というリスク』 効草書房.
- 読売広告社・ハイライフ研究所, 2001, 『「共立夫婦」—DINKS から共立夫婦へ—』 日科技連出版社.